

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向

川 口 高 風

一 はじめに

三 禅戒研究資料

序

研究資料

研究動向

四 おわりに

二 清規研究資料

序

研究資料

研究動向

一 はじめに

活発になされてきたが、しかしこれから専門研究をする上において、それに関する資料並びに先徳のそれに対する研究論文を参照し、今日の学的水準を一通り知つて、それらの論文を機能的に活用し、新たな研究へ歩み出して、今までの学問の水準を超え、さらに一步でも二歩でも独自の研究を開拓して行くことに努めなければならないことは、若き学究者の大きな課題である。

しかるに、曹洞宗における宗学研究資料も、曹洞宗全書刊行会による全国寺院の資料調査により、多くの寺院の宝庫などに奥深く秘藏され、未だ十分に開放されていなかつた多くの資料が発見され、『続曹洞宗全書』や『永平正法眼蔵蒐書大成』、「宗学研究」等に発表し、公刊されてきたことは、学究者にとって新しい研究意欲を沸きたたせるものであつて、各方面の専門研究者によつてまとめられた総合研究が

ある。今から十年前、田島柏堂博士が「曹洞宗史の研究資料とその分類法」（昭39・1愛知学院大学禅学研究2）において、この点を鑑み資料の僅少なることを述べ、新資料の発見によって正しい曹洞宗史像を打ち建てるべく旨を発表せられたが、現在では、その論文における研究資料に、さらに多くの資料が増加される運びになってきた。

ところで、ここに曹洞宗の戒律研究資料を取りあげたのは、最近博林皓堂博士が『道元禪の思想的研究』（昭48・11春秋社）序で、

一般のかたがたの眼蔵研究ないし興味は、その思想にあるから、大半が「現成公案」からはいるようである。この一巻は最もまとまったもの、また深いものであるからである。次には「有時」などが注目される。……「道元の哲学」という側からは、どうしてもこの学び方となる。しかも一般のかたがたは、ほとんど例外なくといふほど道元禪の実践面に踏み込まぬ。だが道元禪の主軸は、清規に則る実践である。清規といえば、すぐ『永平清規』があたまに浮ぶが、眼蔵の中にも「洗面」「洗淨」「行持」等々がある。禪師はそれらを「仏行の威儀」として実践することを最高の仏道としているが、多

くのかたは振り向きもしない。これは眼蔵を思想の書として見るか、実践の規範として受用するかの相違から来る違いである。

といわれるよう、「道元禪の主軸は清規に則る実践」ということにあり、仏行の威儀として実践する曹洞宗の戒律研究は、非常に重要なものといえる。私はこの点に啓発され、宗門における資料と、先徳はいかに考えていたかをみるために、その研究資料などをまとめてみた。私は今迄、中国律宗の研究を進めてきたが、曹洞宗の戒律研究資料にも中国律宗の影響が及ぼされており、また曹洞宗独自の戒律觀もあるようで、曹洞宗学の立場から戒律研究を進める上の基礎的作業を、ここに試みたのである。

さて曹洞宗において、戒律研究資料を見る場合、第一に禅林の規矩すなわち清規と、僧侶の内的規律である戒律すなわち禪戒、さらに禪宗、特に曹洞宗で厳しくいわれる師子相承の関係を証明する伝法（室中三物論）、ということく分けることができよう。例えば、岡田宣法博士の『禪学研究法と其資料』（昭44・11再刊 名著刊行会）の中でも、大体この三種に分類しているが、私は伝法の研究資料と禪戒関係の資料との重複が多い点より、同一項目に取りあげ

ても良いと考え、したがって本稿では、二系統に分類した。

二 清規研究資料

序

清規の出現は禅宗の歴史において、教団的に独立する新しい歴史を作った重要なものである。しかし清規における僧團の規則が、突如として成立したものではない。最初の清規は、百丈懷海（七二〇—八一四）によって『百丈古清規』が成ったといわれるが、百丈以前すでに行わっていたものを集成化されたと考えられる。『百丈古清規』は現存しないため、『勅修百丈清規』卷四の古清規序などによつて、それを推測できるが、古清規序によれば、達磨より六祖を経て百丈時代に至るまで、多くは律院に居住しており、説法住持せる関係上、打坐三昧の規度に合しないことから独立したというごとく、禅僧は律僧と共に居住していたのである。したがって戒律を尊重する律僧よりの影響は、かなりあつたようで、背景に律の様式が多く存在するものと考えられる。しかし僧團は、常に歴史的社會に規制され、変化していくため清規も自ら変化していったが、清

規の基本的内容の礎は、中国律宗の影響と十分に考えられる。特に南山道宣の影響は多く、『四分律行事鈔』や『教誠律儀』などは、その代表といえよう。また道安や慧遠らの僧制や中國國家の僧に対する制度からの影響も考えられるのである。なおまたいえば、天台の『天台小止觀』や『國清百錄』にみられる威儀や制度、規矩、さらに宗密の『円覺經道場修証儀』の規則、そして語録などにみられる各禪僧独自の考え方、各寺院ごとの規則など、禪宗の清規形成に及ぼした影響は多くのものが考えられ、また清規成立後の規制の状態も明らかになってくる。しかし中国のみで考えることではなく、もう一つ越えて、直接律藏に依存して成ったことも考えられ、これら種々の点に着眼し、清規の根本基礎成立を把握していくかなければならない。

次に日本における清規は、中国と異なつた点がある。それは、清規が歴史的社會の変化と共に、絶えず変化したことの実証という点にある。日本の清規で、最初に成文化されたのは『永平清規』であろうが、しかし榮西の『興禪護國論』や『出家大綱』には、『禪苑清規』を引用し、規律を正しくさせることが述べられている。だが、未だまとまつていない。『出家大綱』は、日本の禪宗における最初の

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

規律書といえるが、大部でなく注意書き程度のもので、栄西門下の規矩の総合的なものとはいえない。その後、臨濟宗では円爾弁円、蘭溪道隆、清拙正澄、東漸健易などが、各居住寺院を中心として清規をまとめ、江戸時代になると『黄檗清規』を中心に、明朝禪の様式を取り入れた多くの清規が出現してきた。曹洞宗では『永平清規』『瑩山清規』が最初といえようが、しかし『永平清規』は、他の清規類と異なり、具体的な行動に対する規矩でなく、精神的な面の主張が強いようで、具体的なのは『瑩山清規』といえよう。後には、江戸時代の宗統復興並びに古規復古運動のもとに、永平・瑩山両清規の注釈書や宗祖の教えに復ろうとする意図を持った清規類が著わされ、大乗寺や普済寺、可睡齋など、各寺院における清規が成立してきたのである。

研究資料

百丈古清規

禅苑清規卷十・規繩頌、宋高僧伝卷十・百丈懷海伝、景德伝燈錄卷六・禪門規式、勅修百丈清規卷四・古清規序 参照。

禅苑清規十卷 崇寧二年（一一〇三）長蘆宗蹟

別名・崇寧清規 曹全書・清規、**卍**続藏二・十六・五

禅苑清規總要二卷（元・道齊）禅苑龜鏡文聞解一卷（明和五・面山瑞方、曹全書・注解四）禅苑龜鏡文求寂參一卷（明和六・瞎道本光）

入衆日用清規一卷 嘉定二年（一二〇九）無量宗壽

別名・無量壽禪師日用小清規 国訳禪叢二ノ五、国訳禪

大成十一、**卍**續藏二・十六・五

入衆日用清規抄（笑雲清三・天文十九写）入衆日用別山鈔（無著道忠手沢本）無量壽禪師日用小清規碑説二卷（木嶮惠僕・元禄九序）

入衆須知 景定四年（一二六三）頃 不明

卍續藏二・十六・五

叢林校定清規總要二卷 成淳十年（一二七四）惟勉

別名・咸淳清規、**警**州清規、校定清規、**卍**續藏

二・十七・一

叢林備用清規三卷 至大四年（一二三一）沢山式咸

別名・至大清規、沢山清規 **卍**續藏二・十七・一

幻住庵清規 延祐四年（一二三七）中峰明本
別名・日用須知、庵事須知 **卍**續藏二・十六・五

律苑事規十卷 泰定二年（一三三五）省悟心宗

正統藏二・十一・一

勅修百丈清規八卷 至元四年（一三三八）東陽德輝

大正藏四八、正統藏二・十六・三、國訣一切經・諸宗部
九、

百丈清規証義記九卷（儀潤 正統藏二・十六・四、五）

百丈清規抄（義堂周信）百丈清規抄（萬宗中淵）勅修百丈

清規抄（東漸健易）勅修百丈百丈清規抄（雲章一慶、桃源瑞仙）

百丈清規要綱（雲章一慶）百丈清規抄（常菴龍崇補）百

丈清規注鈔（写、室町時代、不明）百丈清規抄（雪山領永
瑾）勅修百丈百丈清規左觸（無著道忠）修百丈百丈清規備考（写、
不明、松ヶ岡文庫蔵）

村寺清規二卷 至正元年（一三四一）澹寮繼洪
修教苑清規二卷 至正七年（一三四七）雲外自慶
尊正規 明・覺浪道盛

叢林両序須知一卷 崇禎十二年（一六三九）費隱通
容撰、百癡行元編 正統藏二・十七・一

永平元禪師清規 希玄道元

曹全書・宗源一、大正藏八二、道元全集、國訣一切經・

諸宗部二三、永平元禪師清規聞解（面山）永平小清規附

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

新學須知（文化二・玄透即中 曹全書・清規）永平小清規
翼（天保九・黃泉無著 曹全書・清規）略赴粥飯法（瞎
道本光）略述赴粥飯法求寂訓（瞎道本光）

典座教訓事略（面山瑞方）典座教訓聞解（面山瑞方）衆

寮箴規求寂參並大己法求寂參 龜鏡文求寂參（明和二・瞎道本光 曹全書

・注解三）衆寮箴規然犀（元祿十四・德嚴養存 曹全書
・注解三）衆寮箴規聞解（寛延三・面山）對大己法求寂
參（明和六・瞎道本光）知事用心指南記（祖山輔教）

瑩山和尚清規 瑩山紹瑾

別名・洞谷清規、能洞谷山永光禪寺行事次第 曹全書・
宗源下、大正藏八二、常濟大師全集

準瑩山清規指南簿（不明・享保十四写）瑩山清規尚古
(不明・写)

正法清規二卷 壽雲良椿

續曹全書・清規

廣沢山普濟寺日用清規 大永七年（一五二七）秀茂編

曹全書・清規

廣沢山普濟寺疏回向雙紙 不明

楣樹林指南記 延宝二年（一六七四）月舟宗胡

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

- 別名・相樹林大乘指南簿、大乘寺内清規、外堂常規、日
課月課雜記目録、雲堂常規 曹全書・清規
- 相樹林年中行事侍者日鑑 天保十二年（一八四一）写 壽德筆
- 相樹林日鑑圖說 嘉永四年（一八五二）写 梅鶯筆
- 相樹林大乘禪門戒直壇指南記 宝曆十二年（一七六二）写 純真龍筆
- 海會堂日用毘奈耶一卷 享保元年（一七一六）東溟辨日
続曹全書・清規
- 壽昌清規 享保十二年（一七二七）心越興儔
- 東臯全集附錄
- 洞上規繩一卷 享保十八年（一七三三）刊 寂堂嫩空
曹全書・清規
- 曹洞禪林粥飯日用鉢式一卷 元文六年（一七四一）段山
旭昌
- 續曹全書・清規
- 橋谷内清規 享保年間（一七一六～三六）崇信寺格門書写
- 曹全書・清規
- 橋谷太洞指南 安永年間（一七七二～八一）崇信寺黃山書写
曹全書・清規
- 橋谷進山并開堂式一卷 寛保三年（一七四三） 不明
- 続曹全書・清規
- 永溪山典座寮指南記一卷 寛延二年（一七四九）萬仞道坦
曹全書・清規
- 祈雨法壇儀規一卷 宝曆十年（一七六〇）萬仞道坦
続曹全書・清規
- 沢氏洗淨略作法 宝曆二年（一七五一）刊 面山瑞方
曹全書・清規
- 洞上僧堂清規行法鈔五卷 宝曆三年（一七五三）面山瑞方
曹全書・清規
- 洞上僧堂清規行法鈔拾遺 宝曆三年（一七五三）面山瑞方
洞上僧堂清規考訂別錄八卷 宝曆五年（一七五五）面山瑞方
曹全書・清規
- 洞上伽藍諸堂安像記 宝曆九年（一七五九）刊 面山瑞方
曹全書・清規
- 施餓鬼作法一卷 享保十二年（一七二七）写 面山瑞方
續曹全書・清規
- 経行軌聞解 元文四年（一七三九）序 面山瑞方、慧中編
曹全書・注解四
- 龜鏡文聞解 面山瑞方、慧觀編
曹全書・注解四

洞上唱禮法、繞唱禮法	宝曆四年（一七五四）	面山瑞方	伝衣象鼻章巴歌	文化五年（一八〇八）	玉洲大泉
承陽大師報恩講式			繞曹全書・清規		
糸氏法衣訓	明和五年（一七六八）	面山瑞方、慈方編	壽山清規	文化十五年（一八一八）	寂室堅光
大日弘全書七三、繞曹全書・清規			繞曹全書・清規		
洞上伽藍雜記一卷	安永四年（一七五五）刊	荊巖慧璞	革弊論	文政三年（一八二〇）	默室良要
曹全書・清規			法服格正	文政四年（一八二一）	默室良要
開戒會燒香侍者指揮一卷	寶曆十年（一七六〇）写	指月慧印	繞曹全書・清規		
三足鼎儀軌一卷	寶曆十三年（一七六三）刊	竜重旭泉編	夏中要期法畧辯	文政八年（一八二五）	默翁源無
太平山諸寮日看一卷	明和九年（一七七二）不白		別名・夏安居要期法畧辯		
曹全書・清規			永平小清規翼二卷	天保九年（一八三八）刊	黃泉無着
興因寺首座寮定規覺一卷	天明五年（一七八五）不明		曹全書・清規		
圓應用清規	寛政五年（一七九三）玄透即中		增福山授戒直壇指南	天保十年（一八三九）惠戒	
續曹全書・清規			曹全書・清規		
祖規復古雜稿	寛政八年（一七九六）玄透即中		青原山永沢寺行事之次第一卷	室町時代？	不明
續曹全書・清規			曹全書・清規		
吉祥山永平寺小清規三卷	文化二年（一八〇五）刊	玄透	萬松山可睡齋清規	不明	
即中			曹全書・清規		
曹全書・清規			授戒會侍者暨直壇指南一卷	廣島・國泰寺	不明
寄大乘寺書並	不明	玄透即中	曹全書・清規		
曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）			授戒會室侍私記一卷	廣島・國泰寺	不明
曹全書・清規			曹全書・清規		
禪規指南	不明		禪規指南		

〔臨濟宗〕

大正藏八二

誓度院条条規式 心地覺心（一一〇七一一二九八）

弁道清規 蘭溪道隆（一一一三一一二七八）

建長寺法語規則 蘭溪道隆

慧日山古清規 文保二年（一三一八）円爾弁円

別名・恵日清規

大鑑禪師小清規 嘉曆二年（一三二七）清拙正澄

別名・大鑑清規 大正藏八一

大鑑禪師廣清規 不明 清拙正澄

叢林拾遺略清規 応安三年（一三七〇）頃 東漸健易

別名・東漸清規、建易清規

能言清規 応永の頃（一三九四～一四二八）不明

別名・相國寺清規

南禪清規 不明

南禪寺月中須知及南禪寺常住諸回向並疏 文明十一年（一

四七九）玄賀写

韋菴日用清規 不明 周建

諸回向清規式五卷 永祿九年（一五六六）天倫楓隱

大正藏八一

黃檗清規 寛文十二年（一六七一）隱元隆琦 高泉性澈編

黃檗小清規 嶺中元漢

別名・黃檗内清規

黃檗規定 不明

山堂清規二卷 高泉性澈

慈悲水懺法備檢 正徳五年（一七一五）元鍊大拙

小叢林略清規三卷 貞享元年（一六八四）無著道忠

大正藏八一

小叢林略清規證解（無著道忠）

正法山清規 無著道忠

日用軌範略註 無著道忠

日用軌範補箋 無著道忠

叢規口實 無著道忠

毘尼日用錄 無著道忠

出家略作法 無著道忠

副寺須知

無著道忠

東福寺清規 無著道忠

東山建仁禪寺月分須知 高峰東暎

東山行堂須知一卷 高峰東暎

心翁和尚假名清規 不明 心翁等安

研究動向

清規は、すでに述べたごとく禪宗教団の独立を意味するものといえ、その僧団の生活規範である。かつて宇井伯壽博士が「百丈清規の歴史的意義」（昭16・1『道元禪師研究』所収）として、意欲的にこの方面的研究をなすや、東洋史の方面から三島一氏によつて、叢林における寺庫の機能や役目に關する研究がなされ、「唐宋の寺庫に就いて」（昭9・5史学雑誌45・7）「唐代寺庫の機能の一、二について」（昭15・3『池内博士還暦記念東洋史論叢』所収）「叢林における庫司の職掌に關する一考察」（昭16・12『加藤博士還暦記念東洋史集説』所収）などを発表された。

ところで最近では、清規研究に注目がおかれて、鏡島、佐藤、小坂三氏の『訳註禪苑清規』（昭47・7曹洞宗宗務厅）の公刊は、その代表といえる。本書では、各異本の校訂がなされ、特に今まで不明であった高麗本にまで及んでいることは、『禪苑清規』の新しい定本といえるものである。『禪苑清規』の異本の金沢文庫本については、閔靖博士が

「金沢文庫の禪籍に就いて」（昭17・7『積翠先生華甲寿記念論纂』所収）を発表して以来、最近までなかつたが、鏡島元隆博士が「金沢文庫本『禪苑清規』について」（昭43・3金沢文庫研究144）を発表し、『金沢文庫資料全書』第一巻禪籍篇（昭49・3金沢文庫）に、原本が活字化され、解題が付された。また高麗本については、小坂機融氏の「禪苑清規の変容過程について——高麗版『禪苑清規』の考察を介して——」（昭47・3印仏研20の2）や「金沢文庫本禪苑清規と高麗版」（昭47・4金沢文庫研究192）がある。さらに北宋時代の経済生活を『禪苑清規』よりながめた、佐藤達玄氏「北宋叢林の経済生活」（昭42・3駒大仏研紀25）椎名宏雄氏「北宋叢林の経済生活について」（昭42・3印仏研15の2）佐藤達玄氏「禪苑清規よりみた叢林の生活威儀」（昭48・9仏教学研究30）があり、その他、近藤良一氏「長蘆宗蹟について」（昭41・3印仏研14の2）「禪苑清規に於ける淨土思想」（昭42・1北海道駒大研紀1）佐藤達玄氏「禪苑清規について」（昭42・3印仏研15の2）などをあげることができるものであるが、その古清規は現存しないため、現存するものとして『禪苑清規』が最も古く、かつ古清規の意を受

け継いだものといえる。古清規の原型とその精神を究明しようとした木村静雄氏「古清規考」（昭14・7禅学研究31）大石守雄氏「古清規について」（昭28・10禅学研究44）博林皓堂博士「百丈禪師の規律」（昭30・12大法輪22・12）中川孝氏「百丈懷海禪師の禪法」（昭40・12印仏研14の1）近藤良一氏「百丈清規の成立とその原型」（昭43・11北海道駒大研紀3）や、その精神が変化していった過程をみた鏡島元隆博士「百丈古清規変化過程の一考察」（昭42・3駒大仏研紀25）近藤良一氏「百丈清規と禪苑清規」（昭44・3印仏研17の2）原田弘道氏「百丈古清規と禪苑清規」（昭44・11曹洞宗研究員生研紀1）があり、講演をまとめたものとして、鏡島博士の「禪宗における経済生活」（昭44・4駒大仏教経済研究3、昭44・5、6大法輪昭36・5、6）がある。その後、元國家の勅によって定めた「勅修百丈清規」について、大石守雄氏「勅修百丈清規考異」（昭32・3印仏研5の2）や佐藤達玄氏「元代叢林の経済生活」（昭42・12印仏研16の1）の研究があるとともに、宮田菱道氏によつて書き下されている。（昭13・4国訳「一切經」諸宗部九 大東出版社）また、これら中国の諸清規の歴史的展開をながめたものには、今枝愛真博士「清規の伝来と流布について」（昭35・8日本歴

史146）鎧本光信氏「禪清規の宗教学的研究」（昭36・1宗教研究166）小坂機融氏「清規変遷の底流」（昭38・4宗学研究5）や高雄義堅博士「禪林諸清規の性格」（昭39・1宗教研究17）大石守雄氏「清規の研究」（昭39・3禅学研究54）楠俊道氏「宋代清規と禪戒」（昭50・3宗学研究17）などがあげられる。そして概論的には、南懷瑾氏の『禪宗叢林制度與中國社會』（昭39・5芸文印書館）があり、禪の影響が道教に及ぼし、その融合思想より生れた全真教の清規については、金山龍重氏の「全真教の清規」（昭18・1宗教研究114）や窪徳忠博士「道教清規考（清規玄妙について）」（昭28・10宗教研究136）、「道教の清規に就て」（昭28・12宗教研究137）など、有意義な論文が専門学者によつて著わされている。
なお最近、土橋秀高氏が「中国における戒律の屈折」（昭45・7龍大論集393）を書かれ、清規は戒律を屈折したものであるとみなす秀れた論文で、清規の成立に僧制の影響があるということである。この点について以前、小笠原宣秀博士が「支那の僧制について」（昭7・10龍大論叢304）で問題提起をしたことがある。これからは清規の成立の内容を、僧制との関連からも見なければならなく、新しい研究課題となろう。さらに最近は、中国禪宗と律宗の法系

との合致することが研究されて、禅籍や禅宗の戒律観に関する論文が見られるようになつた。これについては、柳田聖山氏「大乗戒經としての六祖壇經」（昭39・1印仏研12の1）博林皓堂博士「禪戒成立の契機——六祖壇經を中心として——」（昭9・3駒大実踐宗乘研究会年報2）があり、特に北宗禪との戒律觀について、島地大等博士の「北宗禪の一心戒」（大4禪學雜誌19の6）や椎名宏雄氏「北宗禪における戒律の問題」（昭44・3宗学研究11）、「初唐禪者の律院居住について」（昭44・3印仏研17の2）田中良昭氏「初期禪宗と戒律——受菩薩戒儀を中心として——」（昭44・3宗学研究11）などをあげることを示唆している。

ところで、日本における『永平清規』の研究は、多くの講義本や岩波文庫本（大久保道舟博士『道元禪師清規』昭16・11）などによる訳註があげられるように、研究論文も多い。例えば、梶川乾堂氏「永平清規講演」（大正2・仏教史学3の3、5、6、9）博林皓堂博士「道元禪師の教學と入衆日用清規」（昭15・3駒大実踐宗乘研究会年報8）、「清規に於ける往生思想と永寧二規」（昭15・4駒大仏教学会年報10）黒丸寛之氏「永平清規の性格」（昭36・3印仏研9の2）石田瑞磨博士「道元——その戒と清規」（昭37・3、4、5金沢文庫研究

8・3、4、5）鏡島元隆博士「道元禪師と引用清規」（昭39・4宗学研究6）古田紹欽博士「道元における持戒持律思想の展開」（昭39・6『日本佛教思想史の諸問題』春秋社）近藤良一氏「百丈清規と永平清規」（昭40・1印仏研13の1）田中真海氏「永平清規の構造」（昭50・3完学研究17）などがみられる。また日本における清規を全体から見た上村觀光氏「本邦に於ける百丈清規の流布」（大8・9『禪林文藝史譚』大鎧閣）稻葉明堂氏「清規を中心として觀たる作務考序説」（昭4禪學研究9・10）田島柏堂博士「清規を基調としての禁藝碑考」（昭13・3駒大実踐宗乘研究会年報6）鏡島博士「清規に於ける坐禪觀の変遷」（昭30・3印仏研3の2）大石守雄氏「清規にあらわれた年中行事」（昭35・2禪學研究50）鎧本光信氏「禪清規の禪淨併習について」（昭37・1印仏研10の1）「五山文学と禪清規」（昭38・1印仏研11の1）小坂機融氏「清規実踐の基礎的問題について」（昭37・3宗学研究4）「清規變遷の底流(1)」（昭39・4宗学研究6）「室町前期に於ける禪の規範——特に曹洞下の清規を中心にして——」（昭40・3印仏研13の2）「曹洞禪に於ける規範の構造——室町後半期の変容について」（昭40・4宗学研究7）木下純一氏「叢林生活の基本的性格」（昭44・3宗学研究11）などあげら

れるが、特に江戸時代宗統復古運動として起った古規復古運動については、鏡島博士の「玄透即中と古規復興」（昭33・1印仏研6の1）や「古規復古運動と其思想的背景」（昭33・3駒大研紀16）山口晴通氏「洞門清規にみる隣派の影響とその批判」（昭40・3印仏研13の2）「永平小清規成立の意義」（昭40・4宗学研究7）小坂機融氏「近世に於ける曹洞禪の復興—特に清規恢興の前提—」（昭41・3印仏研14の2）「永平小清規における復古思想の意義」（昭43・3印仏研16の2）渡部賢宗博士「小叢林略清規の得度儀規について」（昭43・3印仏研16の2）によつて明らかにされており、規矩大乗といわれる大乗寺の清規については、博林博士「月舟の雲堂常規と黄檗清規」（昭32・1印仏研5の1）山口晴通氏「月舟宗胡と曹洞復古」（昭39・3印仏研12の2）「柏樹林清規の性格と意義」（昭39・4宗学研究6）などあり、古田紹欽博士の『日本佛教思想史の諸問題』（昭39・6春秋社）には、円山道白、月舟宗胡、徳翁良高、独庵玄光ら復古運動に活躍した人の研究がまとめられている。また僧堂における修行を、教育的理念」（昭29・2『中世初期佛教教育思想の研究』所収）や宮坂哲文氏「禪における人間形成」（昭45・3再刊 評論

社）などがあり、清規を把える見方として、重要な意義を持つものである。さらに、清規によって建立された七堂伽藍などを、建築学からながめた横山秀哉博士の「古規僧堂について」（昭35・1宗学研究2）「曹洞宗塔頭の性格と建築」（昭36・3宗学研究3）や『禪の建築』（昭42・3彰國社）は、全国の専門僧堂の大きさを細かく調べた実証的研究で、視点の変った注目すべきものである。なお『永平清規』に比べ、『瑩山清規』『黄檗清規』などの研究は、最近まで余り見られなかつたが、瑩山禪師六五〇回大遠忌を機縁として、研究が盛んに行われ、東隆真氏により『瑩山禪師清規』（昭49・2大法界閣書店）と題する訓註、解説本が出された。また鏡島元隆博士「清規史上における瑩山清規の意義」（昭49・12『瑩山禪師研究』所収）田島柏堂博士「山上氏藏『瑩山清規』と愛知学院大学図書館「瑩山示寂文」について」（昭49・12『瑩山禪師研究』所収）竹内道雄氏「宗統復古期より見たる瑩山紹瑾禪師の地位」（昭49・12『瑩山禪師研究』所収）などの研究成果も出た。その他、大石守雄氏「大鑑清規の研究」（昭29・12禪学研究45）田島博士「山上氏藏写本『瑩山清規』について」（昭33・12印仏研7の1）博林博士「宗門の性格転変と瑩山清規」（昭35・3印仏研8の2）山端

昭道氏「瑩山清規の写本について」（昭48・3 宗学研究15）
本巣好隆氏「瑩山清規の前後」（昭49・3 宗学研究16）東隆
真氏「瑩山清規の成立とその性格」（昭49・3 宗学研究16）
宮本利寛氏「瑩山清規の一考察」（昭50・3 宗学研究17）などもみられる。

三 禅戒研究資料

序

禅戒は清規と同様、禅宗の倫理道徳である。清規はその中でも形式的なものであるが、禅戒は禅教理の倫理化ともいわれている。さて禅戒は、禅戒という特別の戒があるのか、それとも単に、禅宗の戒の略称であるのか、種々問題がある。しかし根本的には、仏教戒と同様であるが、それを坐禅と関係し、両者を同格とみなして智慧と共に三学一致論を主張する所にあるとみられる。それは、単に禅戒を大乗戒とみなすのではなく、禅戒には禅戒独特の意義があるためであり、その考えを論議していくのが、江戸時代盛んに行われた禅戒論争で、多くの著作があらわされた。さらに禅戒の一部とみなす嗣法、伝法の問題も、月舟宗胡、円

山道白らの宗統復興運動により、華々しく論議され、幕府にまで上書されており、重要な問題であった。特にこの問題は、曹洞宗のみにて行われたものであるが、伝法研究をする上において、室中三物に対する論議も行われ、禅戒研究の一部を占めるものであろう。

研究資料

出家大綱	榮西
受禅戒作法	榮西
興禪護國論	榮西
教授戒文	道元
曹全書・宗源下、道元全集	
永平教授戒文鈔源支（寶曆二・萬仞道坦）教授戒文略註 (萬仞道坦)	教授戒文試參請（瞎道本光・曹全書・禪戒）
教授戒文略辨（本秀幽蘭・曹全書・禪戒）教授戒文集釋 (萬延元・信操永堅)	永平教授戒文訓釈（不明）教授戒 文纂解（秋野孝道 昭2・鴻盟社）
仏祖正伝菩戒翻作法 懷辨編	道元全集

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

梵網經略抄二卷 経豪写

曹全書・注解二卷

正法眼藏・面授、嗣書、授記、道元

永平開山御遺言記録、建長五年（一一五三）、

徹通義价編

曹全書・宗源下、道元全集

仏祖正伝菩薩戒教授文、瑩山紹瑾

常清大師全集、曹洞宗古文書

禪門授普薩戒規一卷、虎閔師錄

別名・禪門受戒軌、禪戒規

血脈法式、永正九年（一五一二）、周鼎中易

弘戒法儀一卷、隱元隆琦

戒殺放生文注解一卷、隱元隆琦

黃檗授戒日規一卷、月潭道澈

黃檗歷代戒壇執事記、不明

獨庵俗談二卷、元禄三年（一六九〇）、獨庵玄光

戒殺放生文編

元禄十四年（一七〇一）、獨庵玄光

洞門劇譚

元禄十三年（一七〇〇）、梅峯竺信

曹全書・室中

正法嫡伝獅子吼集二卷、元禄十五年（一七〇一）、定山良光

曹全書・室中

正法嫡伝獅子吼集辨解、宝永元年（一七〇四）、桂林崇琛

林丘客話二卷、寶永三年（一七〇六）、梅峯竺信

曹全書・室中

梵網經古迹記折衷五卷、元禄十五年（一七〇一）、德嚴養存

禪戒訣、元文五年（一七四〇）、卍山道白、三州白龍

曹全書・語錄二（卍山和尚広録所収）。

禪戒訣註解三卷、宝暦十三（一七六三）、卍山道白、卍海崇瑞

曹全書・禪戒

禪戒游刃二卷、宝暦七年（一七五七）、卍山道白、三州白龍

曹全書・禪戒

洞門衣鉢集、正徳元年（一七一一）、卍山道白、三州白龍

曹全書・室中

対客閑話、正徳五年（一七一五）、卍山道白、三州白龍

曹全書・禪戒

禪餘套稿、正徳四年（一七一四）、卍山道白、面山瑞方編

宗統復古志二卷、宝暦十年（一七六〇）、卍山道白、三州白龍

続曹全書・室中

伝法室内式、元禄五年（一六九二）、徳翁良高

洞門龜鑑一卷、元禄十六年（一七〇三）、徳翁良高

続曹全書・室中

護法明鑑一卷 元禄十六年（一七〇二）徳翁良高

続曹全書・室中

続護法明鑑集 享保三年（一七一八）序、刊 徳翁良高

徳峯即現増訂

続曹全書・室中

損翁老人見聞寶永記 損翁宗益

感應護國徒薪論二卷 正徳三年（一七一三）田翁牛甫

続曹全書・室中

如長老得戒因請戒之註解逐一下語 槐國萬貞

永平丈室夜話菩薩戒義 享保十七年（一七三二）大虛喝玄

曹全書・禪戒

青鵲原夢語二卷 元文五年（一七四〇）萬回一線

続曹全書・室中

禪戒伝耳錄 明和四年（一七六七）雪心白癡、了派如宗

曹全書・禪戒

叢林藥樹二卷 享保四年（一七一九）石雲融仙

曹全書・禪戒

説戒二卷 宝曆十年（一七六〇）面山瑞方、慧恩

曹全書・禪戒

雪夜爐談一卷 元文三年（一七三六）面山瑞方、慧中

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

続曹全書・室中

大戒訣三卷 延享五年（一七四八）面山瑞方

曹全書・禪戒

大戒訣或問 延享四年（一七四七）面山瑞方

曹全書・禪戒

得度或問 宝暦十三年（一七六三）面山瑞方

曹全書・禪戒

洞上金剛杵 宝暦五年（一七五五）面山瑞方

曹全書・宗源下

梵網戒本口訣一卷 宝暦十三年（一七六三）面山瑞方、慧苗

曹全書・禪戒

建仁禪寺戒壇錄 明和三年（一七六六）面山瑞方、慧苗

曹全書・禪戒

開戒普說 面山瑞方

曹全書・語錄三（面山和尚廣錄所收）

室内訓訣 室中口訣諸式 面山瑞方

曹全書・室中

洞上室内口訣 享保十五年（一七三〇）面山瑞方

曹全書・室中

洞上室内口訣 享保十五年（一七三〇）面山瑞方

曹全書・室中

洞上室内十六秘訣 面山瑞方

続曹全書・室中

伝法室内密示聞記 嘉永二年（一八四九）面山瑞方

別名・伝法室内隨聞記、伝法儀規密示

曹全書・室中

洞上室内断紙揃非私記 面山瑞方

曹全書・室中

洞上室内三物論 面山瑞方

曹全書・室中

剃度直授菩薩戒儀軌 宝暦二年（一七五二）逆水洞流

続曹全書・禪戒

剃度周羅訣 宝暦二年（一七五二）逆水洞流

續曹全書・禪戒

洞上得度或問辨儀章 明和二年（一七六五）逆水洞流

續曹全書・禪戒

大乘寺護法明鑑 逆水洞流、一入覺門

續曹全書・禪戒

讀大戒訣並永平剃度文三卷 宝暦三年（一七五三）鬚珠秀岳

曹全書・室中

少林一心戒普說 安永二年（一七七三）蘭陵越宗

曹全書・禪戒

仏祖正伝禪戒鈔 宝暦八年（一七五八）萬仞道坦

曹全書・禪戒

仏祖正伝禪戒本義 安永三年（一七七四）萬仞道坦

曹全書・禪戒

禪戒本義事文略記 安永四年（一七七五）萬仞道坦

禪戒教授文略註

洞上伝戒辨 寛延三年（一七五〇）萬仞道坦

曹全書・禪戒

洞上伝法辨 宝暦十一年（一七六一）萬仞道坦

曹全書・室中

勃陀勃地並三辨

伽藍相統辨

曹全書・室中

萬仞道坦

教授戒文鈔源支

宝暦二年（一七五二）萬仞道坦

正法眼藏面授章辨

萬仞道坦

曹全書・室中

客間對辨一卷 萬仞道坦

續曹全書・室中

室内三物秘辨 宝暦八年（一七五八）萬仞道坦

曹全書・室中

教授戒文略註 安永元年（一七七二）萬仞道坦

不能語規律 寛保三年（一七四三）指月慧印
曹全書・禪戒

三休老人生死辯 明和九年（一七七二）萬仞、慧輪

指月慧印
贈道本光

金龍軒問答 萬仞問、面山答

不能語昭綸義筌二卷 宝暦元年（一七五一）
誠殺生法語 延享四年（一七四七）指月慧印

続曹全書・法語

曹全書・禪戒

禪戒問答

勸善小語 安永八年（一七七九）指月慧印
曹全書・禪戒

須知通儀 高峰東暉

三帰依增語
指月慧印

東山布薩儀

曹全書・禪戒

高峰東暉

開戒會燒香侍者指揮
指月慧印

巨海禪師戒說 一卷 安永八年（一七七九）巨海匡津

禪戒問答 寛保二年（一七四二）玄長一丈

仏祖心印戒儀 東嶺圓慈

曹全書・禪戒

戶羅敲鼈章 享保九年（一七二四）甘露英泉

宗伝戒文試參請一卷 明和四年（一七六七）瞎道本光

曹全書・禪戒、日大藏經・戒律章疏三

洞上叢林公論二卷 寛保元年（一七三九）乙堂喚丑

續曹全書・禪戒

禪林飴瓦一卷 寛保元年（一七四一）宣默玄契

禪戒口訣集 宝暦四年（一七五四）瞎道本光
戒會落草談 享和四年（一八〇四）雲櫻泰禪

曹全書・禪戒

禪戒篇 元文二年（一七三七）指月慧印

仏道手引草三卷 文政十三年（一八三〇）鳳樹大賢

一槌碎瓦二卷 天明四年（一七八四）玄樓奥龍

曹全書・禪戒

曹洞宗の戒律研究資料と研究動向（川口）

續曹全書・室中

戒會略談二卷 玄樓奥龍

戒會九品談 玄樓奥龍

說戒略要一卷 玉洲大泉

曹全書・禪戒

十善戒法語 文化十二年（一八一四）寂室堅光

曹全書・禪戒

菩薩戒童蒙談抄 文政二年（一八一九）寂室堅光

曹全書・禪戒

授菩薩十六條戒纂修懺要文 默室良要

伝戒儀語 天保廿二年（一八四一）推翁禪扣

曹全書・禪戒

大戒要文一卷 用潭全龍、野々部至游

曹全書・禪戒

開戒口訣一卷 不明

續曹全書・禪戒

禪戒略談一卷 不明

說戒要文一卷 不明

續曹全書・禪戒

授戒會式二卷 梅指

續曹全書・禪戒

研究動向

禪戒といふ言葉は、栄西の『興禪護國論』において、最初に使われた。しかし禪宗における戒律の意味であるか、あるいは禪戒といふ独自の戒律であるかは種々問題を含んでいる。それらについて考察を進め、禪戒と円頓戒の関係から栄西、道元禪師をながめ、禪戒といふ言葉が使用された時代や意味を問題とした研究に、鏡島元隆博士「禪戒の成立と圓頓戒」（昭42・3日仏年報32）があり、栄西の戒律と道元禪師の戒律観の相違を指摘している。また博士には、同じ問題について「圓頓戒と栄西、道元」（昭37・1印仏研10の1）があり、問題提起を出した好論文である。栄西においては、戒律を禅定に至る手段とみなしているのであり、それらは、角田春雄氏「栄西禪師の戒律」（昭29・3印仏研2の2）、古田紹欽博士「栄西に於ける持戒持律思想の意義」（昭35・3日仏年報25、「日本佛教思想史の諸問題」所収）石田瑞磨博士「栄西とその禪と戒との関係」（昭37・9宗教研究

172) 萩須純道博士「栄西の一心戒について」(昭39・7禅学研究54) 渡部賢宗博士「栄西述とされる『受禪戒作法』について」(昭50・7『禪思想とその背景』春秋社所収)などで論じられている。一方、道元禅師は手段とみなすより、同等位のものとして、戒即定即慧と考えたのである。したがって、道元禅師における禪戒觀は、禪即戒そのものとみなすのである。特に禪師の十六条戒の思想に関しては、種々の説がみられ、石田瑞磨博士は「道元とその戒と清規」(昭37・3、4、5)、金沢文庫研究8・3、4、5)において、当時流行していた淨土教の思想が影響したのであろうとみなす、注目すべき見解を発表しているが、鏡島博士は「禪戒の成立と円頓戒」(昭42・3日仏年報32)にて、石田博士の所説に理解できない点を指摘し、反駁している。そのため現在では(1)如淨説(2)栄西説(3)当時の時代的影響(淨土教の思想)の三説いえるが、十六条という数に規定した点は明確でない。その他、青龍虎法氏「道元禅師の禪戒研究」(大5禪学雑誌20の2~6)、椎木俊雄氏「道元禅師の授戒儀軌に就て」(大6禪学雑誌21の8、10)、立花俊道博士「高祖大師の戒学に就て」(15・3駒大実践宗乗研究会年報8)、渡部賢宗博士「受戒と坐禪との関係に就いて」(昭31・1宗学研

究1) 横井寛道氏「道元禅師の戒論について」(昭34・3印仏研7の2) 古田紹欽博士「道元における持戒持律思想の展開」(昭35・11『福井博士頌寿記念東洋思想論集』後に『日本仏教思想史の諸問題』所収)などをはじめ、黒丸寛之氏「宗門の戒律」(昭36・3宗学研究3)、石田瑞磨博士「道元の戒律思想について」(昭36・12宗教研究17)、清水道雄氏「道元禅師の戒律」(昭37・2教化研修5)、黒丸寛之氏「禪戒と高祖の成仏論について」(昭37・3宗学研究4)、「伝戒と伝法についての一考察」(昭38・4宗学研究5)、「戒行と坐禪についてへ承前V—栄西禅師と道元禅師—」(昭40・4宗学研究7)、青龍宗二氏「道元禅師の仏戒思想—特に十六条戒の成立をめぐって—」(昭49・3印仏研22の2)、渡部賢宗博士「曹洞宗団と戒儀」(昭49・3日仏年報39)、平川彰博士「道元の戒觀と律藏」(昭48・11『道元禪の思想的研究』所収)、金丸憲昭氏「道元禅師における十六条戒の基本姿勢について」(昭50・3宗学研究17)、石附勝龍氏「道元禅師における戒体の問題」(昭50・3宗学研究17)などがある。さらに道元禅師の戒律の根本である『教授戒文』については、椎木俊雄氏「教授戒文に就て」(大6禪学雑誌21の6、7)、青龍宗二氏「教授戒文について」(昭44・3宗学研究11)がみられ、弟子詮慧

が聞き、『経豪がまとめた『梵網經略抄』については、黒丸寛之氏の「禪戒における懺悔論—梵網經略抄の所説について—」（昭39・3印仏研12の2）「懺悔と戒行について—梵網經略抄研究序説—」（昭39・4宗学研究6）「道元禪に於ける受戒と懺悔—道元禪師と梵網經略抄の所説について—」（昭45・9北海道駒大研紀5）や池田魯参氏「梵網經略抄の問題」（昭47・3宗学研究14）中山成一氏「梵網經略抄考」（昭50・3宗学研究17）酒井得元博士「大乘戒儀と禪戒の源流としての梵網經略抄」（昭50・7「禪思想とその背景」所収）などをあげられるが、『梵網經略抄』は、智顗や法藏などの『梵網經』解釈とは異なった道元禪師独自の解釈をしており、『正法眼藏抄』との書誌学的考察は研究されてきたが、思想的研究は今後における開拓すべき課題といえよう。また瑩山禪師の戒律については、『仏祖正伝菩薩戒教授文』に關して、光地英学博士の「瑩山親筆本について」（昭37・1印仏研10の1）、「菩薩戒と瑩山」「教授戒文」（昭49・12「瑩山禪師研究」所収）や藤井昭雄氏「瑩山禪師の戒律觀」（昭49・3宗学研究16）がある。

次に、江戸時代における戒律復興運動として、多くの宗師家が輩出し、盛んに禪戒論争が展開された。それらにつ

いては、鏡島博士の「禪戒思想の展開」（昭26・3「道元禪研究序説」昭36・10「道元禪師とその門流」所収）において、全體の概略を知ることができる。そして各々の人について、石附勝龍氏「卍山禪師の禪戒思想」（昭40・3印仏研13の2）「禪戒一致論考—万仮和尚の著作を資縁として—」（昭41・4宗学研究8）芦田玉仙氏「萬仮道坦と三物秘辨」（昭41・1愛知学院大学禪學研究3）新野光亮氏「万仮道坦和尚の戒律觀」（昭50・3宗学研究17）藤井昭雄氏「天桂禪師派下の戒思想について」（昭50・3宗学研究17）石附勝龍氏「面山和尚の禪戒思想」（昭40・4宗学研究7）「面山和尚の戒体論」（昭41・3印仏研14の2）渡部賢宗博士「道元禪師の得度儀軌を尋ねて—面山本の成立とその疑点」（昭48・11「道元禪の思想的研究」所収）金原東英氏「面山和尚と略作法の沙弥戒授受について—面山本の成立とその疑点」（昭50・3宗学研究17）牧野喜代治氏「曹洞宗に於ける指月禪師の位置と其伝記に就て」（昭8・5駒大仏教学会年報3）黒丸寛之氏「指月慧印の禪戒思想」（昭50・3宗学研究17）犬谷哲夫氏「宗学復興期における禪戒論」（昭50・3宗学研究17）などをあげることができる。

ところで室内の秘法である伝法、嗣法の研究書は、万仮道坦の『室内三物秘辨』の注解書として本嶽祖仙氏・永久

岳水博士『室内三物秘辨講話』(昭5・1禅学普及会)岸沢惟安
氏『室内三物秘辨觸耳錄』(昭8・10奉安殿)丘宗潭・細川道契
『洞上室内三物秘辨講話』(昭24・10高乘寺)杉本俊龍氏『洞
室内切紙並參話研究』(昭13・7滴禪会)、さらに最近では、
永久岳水博士『和訳禪門室内秘錄全集』(昭47・10中山書房)
が公刊されている。論文では、永久博士の「室内伝法作法
の研究」(昭36・3宗学研究3)「室内伝授法物の研究」(昭37
・10駒大仏教學部研紀21)があり、嗣法論については、博林
皓堂博士「嗣承論に於ける天桂の思想的源流」(昭30・3駒
大研紀13)桑原亮三氏「道元禪師における嗣法の問題につ
いて—その哲学の一考察—」(昭37・1印仏研10の1)石附勝
龍氏「嗣法論考—梅峯和尚の未悟嗣法觀」(昭39・3印仏研
12の2)「未悟嗣法の問題—萬匱和尚の著作を中心にして—」
(昭39・4宗学研究6)横井覚道氏「正法眼藏嗣書の伝承と
その思想的意義」(昭41・3印仏研14の2)などもあげること
ができる。

次に禪戒の概略がなされている論文としては、釣宮武雄
氏「禪戒存立の根拠に就て」(昭5禪学研究13)本元良雄
氏「禪戒の具体的解説」(昭10・3駒大実踐宗乘研究会年報3)
博林博士「禪戒成立の契機」(昭9・3駒大実踐宗乘研究会年
報2)「禪戒の相承に就て」(昭14・2駒大仏教學會年報9)
「禪外無戒とその帰結」(昭31・3駒大研紀14)渡部賢宗博士
「禪戒論に於ける一研究」(昭31・3印仏研4の1)「禪戒の歷
史的起源」(昭40・4宗学研究7)「隨時戒と禪戒」(昭40・
12印仏研14の1)「禪戒実踐の一重性」(昭41・4宗学研究8)
本巣好隆氏「戒体論序説」(昭42・3宗学研究8)などみら
れるが、特に禪戒を鎌倉仏教との関連よりみていったもの
に、大屋徳城氏「鎌倉時代禪律二宗の諍議」(大4禪宗240)
「鎌倉時代の禪僧と円頓戒」(大6禪宗262)黒丸寛之氏「禪
戒論の一考察—円頓戒との異同をめぐって—」(昭37・1印仏
研10の1)池田魯參氏「禪戒と鎌倉仏教」(昭45・3宗学研究
12)渡部博士「禪門授菩薩戒規について」(昭50・3宗学研
究17)などをあげられる。その他、佐藤謙一氏「禪戒と五
戒」(昭4禪学研究10・11)寺西玄猶氏「禪戒に就いて」(昭
10・3駒大実踐宗乘研究会年報3)来馬琢道氏「戒律に対する
禪僧の態度の変遷」(昭29・12宗教研究142)渡部博士「受戒
と坐禪との関係に就いて」(昭31・3宗学研究1)佐藤達玄氏
「禪の戒律觀と五戒について」(昭32・1印仏研5の1)伊藤
古鑑氏「禪と戒について」(昭35・2禪学研究50)石川素童氏
『曹洞宗授戒指南記』(昭38・5高頭寺)太田悌藏氏『禪と

倫理』（昭40、12法政大学出版局）などもあげておく。今までものといえよう。

四 おわりに

以上、曹洞宗の戒律研究資料と研究動向をみてきたが、初めに指摘したごとく、最近の曹洞宗学研究資料は多く新出資料が発見され、新しい研究課題が多くなつてきた。かつて昭和の初期に、稻村坦元、大久保道舟、永久岳水氏らが中心となり、宗学研究資料を『曹洞宗全書』という型でまとめ、公刊されてきたが、今回の曹洞宗全書刊行会の資料調査により、以前にも増じて多数の新資料が発見せられ、『続曹洞宗全書』として容易に拝閲することができるようになつた。そして戒律に関する資料も、清規・禪戒・室中などの巻に多数印刻された。

私達が今後に課せられたことは、従来の資料を十分に踏まえ、さらに研究動向も理解し、その上に立つて新資料の研究を進め、新しい土台を打ち建てるといえよう。すなわち従来の研究は、教理史の立場から研究されてきたが、最近では、竹内道雄氏によつて『曹洞宗教団史』（昭

46・6教育新潮社）が著わされ、教団史の研究も進展してきた。だが最初に、博林皓堂博士が主張したことく、道元禅の主軸である威儀、戒律に関する研究は、少いように感じられる。江戸時代以前の資料は、数が少いためある程度までの研究しかできないが、江戸時代における研究は資料の宝庫ともいえるに拘らず、研究は余り進んでいないようである。

そこで本稿により、清規と禪戒共に著作がある人をあげれば、道元禅師、鑑山禪師、月舟宗胡、面山瑞方、方俊道坦の指月慧印、寂室堅光らをあげることができる。宗祖の道元・鑑山両禅師を除けば、すべて江戸時代の人であり、曹洞宗における戒律研究は、江戸時代に華々しく展開されたことが明らかになる。ただここで考えねばならぬことは、戒律研究を曹洞宗のみでとらえるのではなく、江戸時代における仏教界の戒律復興運動がらみなければならないといふことである。というのは、例えば寂室堅光・慈雲鈎光、瑞岡珍牛・豪潮というように、曹洞宗の戒律研究者は、他宗の戒律研究者と交流しているためである。したがつて天台系の安樂律、淨土律、草山律、真言系の靈雲律・如法真言律、正法律の研究者を踏まえ、そこから曹洞宗に影響を

与えた点を追究すると共に、逆に曹洞宗の影響が、他宗の戒律研究者に及ぼしている点をながめ、単に曹洞宗のみの資料でみるのではなく、江戸時代の戒律復興運動全体から、曹洞宗の戒律観の意義を研究していかなければならぬと考えられる。かつて辻善之助博士が『日本佛教史』第九卷・近世篇之三（昭29・4岩波書店）で、江戸時代の諸宗の復興に関して述べられているが、それを読むにつれて

も、その研究姿勢を持たねばならないことを一層感じるのである。

本稿では、曹洞宗に関する資料や研究動向に留めたが、しかし今後は、前述のごとく、江戸時代の戒律研究全体にわたる広い視野を持ち、そこから曹洞宗の戒律研究を進めていきたいと考えており、本稿を今後の研究の布石としている。